

为 了 明 天

ウエイ ラ ミン テイエン

明日のために

子どもたちに希望を 人々に友情を

特定非営利活動法人 宋慶齡基金会 日中共同プロジェクト委員会 (JCC)

<http://www.sokeirei.org>

民間交流を通して日中間の平和友好を さらに発展させよう！

今年は、日中国交正常化45周年に当たります。45周年を機に、本会の民間交流に寄せる思いを記したいと思います。

1972年9月29日、日本と中国は「共同声明」を発表し、国交正常化を実現させました。その趣旨は「日中両国は、一衣帯水の隣国であり、様々な伝統的友好交流の歴史を共有する。両国間には政治体制の相異はあるが、両国は平和友好関係を大切に育み、今後それらを発展させていくために、互いに相互理解を一層深める努力を続ける。」というものです。

以来、日中関係は多分野に亘り大きく発展してきました。例えば、日本の対中輸出入額は1972年の11億ドルから2016年には2,703億ドルに、訪中日本人数は1978年の2万人から2016年には259万人に、訪日中国人数は1978年の7千人から2016年には637万人になっています。国交正常化45周年を迎えた今日、日中両国の「平和友好」関係は事実以外の何ものでもない

と思います。

しかし、現実には、日中関係は多くの難題に直面しています。そもそも両国の間には政治体制及び政治的意見の違いがあり、歴史問題や領土問題を背景に国民感情がときには混迷します。そんな時に国交正常化時の原点に立ち返り、問題を克服するためには、相互理解の道が開けるかどうか問われると思います。それらの基盤、環境を育んでいくのが、両国の友好交流活動の一端を担う私たちJCCの大きな役割の一つです。そのためには、まず何よりも日中の民間交流、とりわけ次の世代を担う青少年の交流を促進することが有効ではないかと思えます。民間交流こそ、日中関係の発展と深化の基礎であり、保証であると考えます。

支援者の皆様のお知恵を頂き、日中両国の相互理解を深めるために交流活動のプログラムを具体的に練り上げ、実現していきたいと思えます。ご協力をお願いいたします。ご提案をお待ちしています。

特定非営利活動法人 宋慶齡基金会 日中共同プロジェクト委員会 理事会

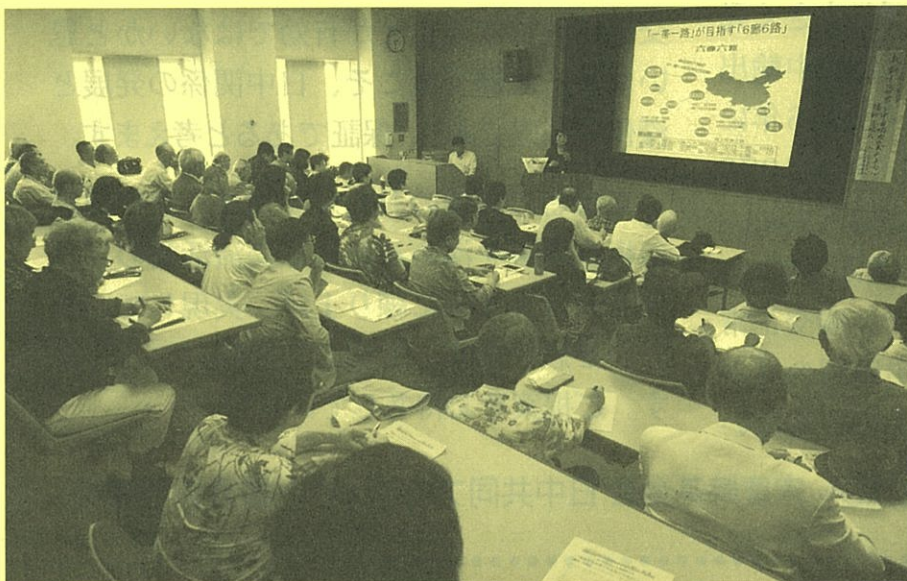
激動する世界と中日協力のポテンシャル

講師 汪婉さん (中国駐日大使夫人、中国大使館友好交流部参事官)

アメリカのTPPやパリ協定など国際的枠組みからの離脱、イギリスのEUからの離脱に代表される保護主義、反グローバル化の動き、また、世界各地におけるテロの多発、中東の混乱、北朝鮮の核・ミサイル発射実験の常態化など、世界情勢は極めて不安定で、グローバルガバナンスが揺らいでいる。このような中、中国と日本はアジアの大国として、世界第2位と第3位の経済大国として、地域の安定と繁栄にいかにかに貢献すべきか。また、グローバルイズム再生への協力メカニズムをいかに構築すべきか。こうした観点から「『一带一路』は、中国が台頭する保護主義、反グローバル化に反対し、開放型協力プラットフォームを構築し、開放型の世界経済を維持、発展させ、世界各国と広範な利益共同体をともに構築していくためのもので、それには中日協力のポテンシャルが大いにある。」と提言された。

I. 「一带一路」とは何か

「一带一路」は「シルクロード経済ベルト」



と「21世紀海上シルクロード」の略称で、実は「6廊6路」からなる壮大なプランである。

「6廊」とは、①「新欧亚大陸橋」(新ユーラシア・ランドブリッジ)、②「中蒙俄経済合作走廊」(中国—モンゴル—ロシア経済回廊)、③

「中国—中亜—西亜経済合作走廊」(中国—中央アジア—西アジア経済回廊)、④「中国—中南半島経済合作走廊」(中国—インドシナ半島経済回廊)、⑤「中巴経済合作走廊」(中国—パキスタン経済回廊)、⑥「孟中印緬経済合作走廊」(バングラデシュ—中国—インド—ミャンマー—経済回廊)の6つであり、アジア、欧州を1つに結び付けるものである。「6路」とは、①「鐵路」(鉄道)、②「公路」(道路)、③「水路」(海路)、④「空路」(航空)、⑤「管路」(パイプライン)、⑥「信息高速路」(インターネット)の6つであり、ハードとソフトの両面によるマルチ的なインフラ網で沿線諸国のつなぐ経済、貿易と交通ネットワークを構築しようとするものである。



II. 「一带一路」の目標や実現可能性について

まず「一带一路」構想が目指す目標として、①国際協力を促進し、「平和、発展、協力、ウ

インウイン」の世界を目指すこと、②アジア地域のインフラ建設とコネクティビティを推進し、地域協力の強化及び域内各国の共同発展を実現すること、③中国も「一带一路」構想を通じて、更なる高水準の改革開放を促すことが挙げられる。この目標を実現するため、「一带一路」はその基本原則として、①平和共存、②開放・協力、③協調・包容、④市場原理、⑤互惠・ウインウイン

の5つが示され、その上に、①信頼する政治関係、②融合する経済関係、③包容する文化関係といった3つの関係の構築・維持及び、①政策の意思疎通、②インフラのコネクティビティ、③資金の融通、④貿易における流通、⑤民心の疎通といった5つの疎通が必要であるとされている。

「一带一路」の建設を推進するために、中国は「推進『一带一路』建設工作領導小組」（「一带一路」建設推進作業指導グループ）を設立した。関連インフラ整備を資金面から支援するために、2014年12月に中国が400億ドル（約5兆円）を出資し「シルクロード基金」を設立、2015年12月に中国が主導し「AIIB（アジアインフラ投資銀行）」（資本金：1000億ドル（約12兆円））を設立した。2017年5月の北京国際協力サミットフォーラムに際して、中国はシルクロード基金に1000億元（約1兆6400億円）の資金を追加拠出すると表明。これまで、中国と「一带一路」沿線諸国との貿易総額は3兆ドルを超え、中国が「一带一路」沿線国への直接投資は500億ドル超、沿線20カ国余りに56の経済協力区を設立、沿線諸国に11億ドルの税収と18万人の雇用を創出。中国と欧州を結ぶ鉄道物流は、51の線路を開通し、4000本を運行。中国の27の都市と欧州



11カ国の28の都市と繋がっている。

Ⅲ. 「一带一路」と日中関係のあり方について

2016年現在、アジア24カ国の人口は39億4900万人、名目GDPは22.1兆米ドルで世界192カ国人口総数（73億4900万人）の53.7%、名目GDP総額（75.2兆米ドル）の29.4%を占めているが、日中両国の人口（15億300万人）と名目GDP（15.1兆米ドル）はそれぞれアジア24カ国全体の38.1%、68.3%を占めている。一方、日本は1991～2015年の成長率は平均0.9%と低く、経済低迷が続いており、中国は地域格差の是正や社会福祉の整備、貧困人口の削減、雇用の拡大、環境問題の解決など様々な難題に直面している。日中両国にとっては、国内外における市場の開拓と拡大、産業の創出と構造転換などは共通の課題である。「一带一路」への参与が日本に多くのメリットをもたらすことになる。日中は、「一带一路」などの広域経済圏建設を通じて、アジアと世界のグローバル化をリードするに十分な実力があるし、その必要性は非常に大きい。「一带一路」を契機に、日中協力と日中関係が一層邁進することが期待される。

（文責：張兵）

世界史に生きる女性—宋慶齡 と日本

講師 久保田博子

(宋慶齡研究者、特定非営利活動法人宋慶齡基金会 日中共同プロジェクト委員会理事)

宋慶齡は可能な限りの視野で世界を見つめていた。世界を見つめ、祖国を見つめ、政治、経済、社会の目の前の様々な動きに関心を寄せた。日常的に心を砕いた対象は「人々」であり、「子どもたち」だった。彼女は権力を求めず、富を蓄えなかった。中国革命の最中、権力闘争が深刻になると、上海に戻り、自ら立ち上げた「救済と福祉の場」で黙々と働き、必要があれば、政権の中枢に赴き、自らの原則と真実を踏まえ勇氣ある発言をした。フランスの文豪ロマン=ロランが「宋慶齡は世界に芳香を放つ一輪の優美な花であるばかりでなく、(人々のために)あらゆる桎梏を噛み切ろうとする恐れを知らぬ獅子である。」と語り、評した由縁である。

宋慶齡と日本との関わりは深い。1913年、彼女が米国留学を終え、帰国途上まず立ち寄ったのが日本だった。宋慶齡は、第二革命失敗後日本亡命中の孫文を訪ね、「革命を手伝いたい」と申し出た。彼女は、当時孫文同様家族を伴い亡命していた父 宋嘉樹、孫文の英文秘書を務めていた姉 宋藹齡と一緒に連日東京・靈南坂の孫文の隠家に通い、孫文の活動を手伝い、やがて姉が孔祥熙と結婚し帰国すると、姉に代わり孫文の秘書になった。宋家は当初東京・神田に住み、まもなく横浜・山手町に移り住んだ。

こうして宋慶齡の革命



への参加は日本でスタートした。彼女は孫文の秘書となり同志となり、妻となった。孫宋の結婚式は東京・牛込区(現在の新宿区)袋町の和田邸で和田瑞の立会いの下、「誓約書」を取り交わすという簡素なものであった。日常的には梅屋トク等の配慮と援助で東京・原宿に新居をもち、新婚生活を過ごした。

1916年春、宋慶齡は、第三革命のため帰国した孫文や同志を追って上海に帰国したが、直後に梅屋夫人にまず一報し、継いで同志の動向を伝え、併せて日本人支援者に思いを馳せている。1924年11月の孫文北上途上の神戸訪問の際には、神戸高等女学校講堂における孫文の「大アジア主義」演説の前に、宋慶齡も女学生1000余名に流暢な英語でスピーチし、最後に「中国と日本の女性が、人類が…理性によって導かれる日々を実現するために努力することを希望します。」と結んだ。翌年春、この旅の途上、宋慶齡は孫文と死別、孫文が目指した国民会議は成らず、統一は遠のいた。一時大革命の機運が宋慶齡を励ます事はあったが、相次ぐ挫折が、1927年夏彼女をモスクワ訪問からベルリン亡命に赴かせた。宋慶齡はベルリンを拠点に、ワイマール共和政末期とファシズムの台頭を目撃し、やがてロラン、バルビュス、アインシュタインら多くの先進的知識人と連携し、反戦反ファシズムの活動に参加し、上海でも秘密裏の国際反戦会議を開催することになる。1931年夏 宋慶齡は母の訃報で帰国したが、その9月18日満州事変が勃発した。これを機に宋慶



※ 参照：久保田博子著『宋慶齡—人間愛こそ正義—』2016年、汲古書院

齡は、国内外のファシズムと日本の侵略に抵抗するため、より広範囲の人々とスクラムを組むことになる。抗日統一戦線である。

民族の独立を死守する。そのために闘う人々の人権・民権を公平に保障しなければならない。宋慶齡は、孫文の三民主義を踏まえ

た原則を発展的に具体化しながら抗日の闘いに臨んだ。

中国は、反戦反ファシズムの国際的趨勢の中で半植民地化を脱し、連合国と呼応し、抗日戦に勝利した。宋慶齡が描いていたシナリオでもあった。

寧夏回族自治区における教育支援

女性教師としての活躍

新保 敦子 (早稲田大学教授)

本報告は、日中共同プロジェクト委員会の前身である宋慶齡日本基金会(1984-2000年)が寧夏回族自治区において、1993年から約10年にわたって実施してきた教育支援事業である寧夏プロジェクト(1993-2005年)の後日談である。本年(2017年)寧夏を訪問する機会を得たことから、当時を振り返りつつ訪問記録を記しておきたい。

宋慶齡日本基金会は、中国の宋慶齡基金会(82年設立)に呼応する形で、84年に創設された。設立以来、中国の児童を対象とする教育活動を推進し、都市部における児童科学公園や児童科学技術館、幼稚園の建設・整備などの事業を重点的に行ってきた。

しかし、創立十周年を記念して、より貧困な地域の児童への支援活動を実施するため、寧夏プロジェクトに取り組むことになった。寧夏回族自治区の南部(西吉、固原、海原)には黄土高原が広がり、少数民族である回族が多数居住している。しかし貧困などの原因から、回族の女兒を中心とする多くの児童が小学校に就学できないでいた。寧夏プロジェクトは、こうした問題を解決し、児童に就学の



機会を提供することを目指したものである。

宋慶齡日本基金会は、2000年に解散した。しかし、寧夏プロジェクトは、事業の成果を着実に根付かせるためのフォローアップが必要ということから、宋慶齡基金会日中共同プロジェクト委員会の支援を受けながら、05年度まで継続し無事に終了した。

寧夏プロジェクトは多岐にわたっているが、中でも回族の女子師範生に対する奨学金の支給を中心とする女性教員の養成事業は、特筆に価しよう。宋慶齡日本基金会では、回族の女性教師を養成するため、固原民族師範(高校レベル、3年制)に入学した回族の女子師範生に、卒業までの3年間にわたり奨学金を支

給してきた。女子師範生の第1期生43名は、95年に入学し、98年より農村の教師として活躍している。同様に、第2期生(96年度入学、40名)、第3期生(97年度入学、40名)を含めて、宋慶齡日本基金会では合計123名の回族女性教員を養成した。

この奨学金のプログラムの特徴は、1人の里親が1人の奨学生を3年間継続的に支援し奨学金を支給する形とし、さらに定期的に手紙のやりとりを行ったことにある。こうした手紙は女子師範生の精神的な支えであったのみならず、寧夏からの便りは日本の支援者にとっても大きな喜びであった。

現在、回族女子師範生奨学金プログラムで養成した女子師範生123名のうちほとんど全員が、正規の教員として寧夏の農村の学校で活躍し、女兒の未就学状況の改善に大きく寄与している。

筆者は、93年に寧夏プロジェクトを開始して以降、実務担当者として関わり、プロジェクトの実施中は、ほぼ毎年寧夏を訪問してきた。

たまたま今年の9月に、寧夏を訪問する機会があり、かつての女子師範生を固原市に訪問した。固原の変貌は著しく、高級ホテルが建

ち並び、ホテルの部屋にはWIFIが完備されていた。また夜には、街中が美しくライトアップされていた。初めて私が寧夏南部地区を訪れた94年には、ホテルで一晩停電のため蝋燭で過ごしたことなど、今となっては懐かしい思い出であり、隔絶の感がある。

かつての女子奨学生の中で、ある者は中学校の教員として活躍し、ある者は農村小学校で指導の中心としての役割を果たしていた。また、私も1人の女子師範生の里親であったが、嬉しいことに、彼女と再会することができた。農村小学校で小学校2年生の担任をし、子どもたちに慕われながら仕事をしている彼女の成長した姿を見て、心動かされるものがあった。また、カバン一杯に果物の砂糖漬けやくるみなどのお土産を頂戴した。里親としてたいしたこともしていないのに、こうして心配りをしてくれる彼女の義理堅さに胸がいっぱいになる思いであった。

寧夏プロジェクトは彼女たちのためであったと同時に、日本の支援者に幸せを運んでくれるものであったことを、改めて認識させられた。彼女たちの今後の活躍と健康を、心から祈念してやまない。

第30回 JCC中国講座 予告

日中の英語教育の比較 —グローバル化時代の言語政策—

講師：新保敦子さん (早稲田大学教授、教育学博士)

グローバル化の中で、超大国に向けて歩み始めた中国が、どのように国家戦略として初等教育段階で英語教育に取り組んでいるのか、中国に比べて日本の課題は何かについて現地調査の成果を踏まえて解説する。

日時 2017年11月11日(土) 18:00~20:00
場所 八王子市学園都市センター第5セミナー室
参加費 無料

[主催] NPO法人 宋慶齡基金会 日中共同プロジェクト委員会

JCC 活動日誌 2017年6月~10月

- 5月27日 第29回 JCC 講座
汪婉さん
「激動する世界と中日協力のポテンシャル」
- 6月24日 事務局会議
- 7月22日 事務局会議
- 9月23日 事務局会議
- 10月28日 事務局会議
- 11月 3日 JCCニュース「為了明天」
25号発行

「為了明天」No.25

2017年11月3日 発行 題字：周肖

発行者：

NPO法人 宋慶齡基金会 日中共同プロジェクト委員会
代表理事 井上睦子

〒192-0046 東京都八王子市明神町4-15-5-905

TEL/FAX 042-646-4210

郵便振替：00170-2-152423